

ひらくは梅花

～梅に集う野鳥たち～



生物室の窓から見える梅の花が、今まさに盛りを迎えている。佐高の校歌にも歌われている「梅花」は、隣接する「朝日森天満宮」の梅がイメージされているのかもしれないが、職員室前の梅の古木には、楠とともに、佐高の歴史を感じさせる確かな存在感がある。

影山先生のご高説によれば、現代では「花」といえば「桜」をさす場合が多いが、万葉の時代（奈良時代）では「花」といえば「梅」をさしていたのだそうだ。「朝日森天満宮」で祭られている菅原道真の「東風吹かば にほひおこせよ 梅の花 主なしとて 春を忘るな」からもそれを伺うことができる。花はにおいが強く、梅干しを作るという実用的な側面も大きかったという。

梅の花は、花期が2月から3月と、他の花が少ない時期でもあることから、多くの野鳥たちにとって、貴重な食料源となっている。食料と言っても、花を食べるのではなく、花の蜜を吸いに来るのだ。一方、梅もその代償として受粉し、結実することができるのだ。

生物室の窓から観察していて、最も数が多かったのは「メジロ」である。大きさはスズメくらいだが、10匹程度の群れでやってきて、にぎやかに花の間を飛び回って蜜を吸い、やがて一気に飛び去っていく。また、ハトより少し小さい「ヒヨドリ」も夢中になって蜜を吸っている。「ヤマガラ」は橙色の腹部が鮮やか。「シジュウカラ」は、黒色、白色、灰色の配色が見事である。確認できた野鳥は、全部で6種類（写真参照）。賑やかな春の訪れである。

「**ひらくは梅花**」 普段、何気なく歌っている校歌の一節には、知（学問）の象徴としての梅花に、若者たちが集い、やがて結実し、栄えて欲しいという切実な思いが込められているのであろう。



職員室前の梅の古木